

私の報告では、アルジェリア伝語文学において常のごとく行われてきたカミュへの参照が、いかなる在り方で、多様な形態をとりつつ、政治的な領野に連動しながら発展していったのかを明らかにしようとするものである。そこではとりわけ四種類のインターテクスチュアリティを見出すことができるだろう。

―― 第一のものは、第二次世界大戦後の作家たちに関わるもので、彼らはカミュという栄えある存在に主導された「アルジェ派」のユマニスト的な立場に拠って飛翔した。彼らの作品は、もちろんその由って来る物理的・社会的環境に徴づけられていたが、植民地における収奪について証言することへの配慮が推進された。とりわけモハメド・ディブは小説『火事』において農民反乱をカミュのルポルタージュに連動させている。より広くは、貧困問題に対する彼らの関心（個人的な体験であるとともに倫理観を形成する場だった）やフランス語への愛着（それはアルジェリアの大地と同様に彼らの共通基盤を為していた）が、彼らの作品をある程度カミュのものとの類縁関係に置くことになった。

―― しかしすぐさま「アルジェリア問題」に対する立場の差が拡大し、おのが民衆の代弁者を自らに任じ、カミュが反乱の側につかないことを理解しない（受入れない）アルジェリア人作家たちは、彼らの著作（新聞記事やフィクション）を通じて『異邦人』の著者との論争的な対話に入った。最初にマムリが小説『義人の眠り』（1955）においてムルソーの裁判やその独特の人物造形といった著名なモチーフを（逸脱させるために）再び取り上げた。カテブは『ネジュマ』（1956）において不条理の概念をナンセンスの極限にまで押し進めて、嘲弄という方法に関して論争を継続した。

―― それから不条理や誤解、ペストといったテーマ系も、ムラード・ブルブーン、ラシード・ブージェドラ、ナビール・ファレスあるいはラシード・ミムニなど、アルジェリア独立後の10年にあらわれその幻滅を語った作家たちのテクストに入り込んでいる。カミュの存在と思考は、そこでアルジェリア小説のなかに斜めから盛り込まれたのだが、それはもはや植民地化の告発のためではなく、世界と格闘する人間を苛む実存的・哲学的な問題にまつわる不安を表現するためだった。これらの小説家たちにとっては、主人

公は総じて失墜した存在であり、新しい社会を蝕む社会組織の病理（ペスト）を解剖してみせるのだ。同時に、カテブは『星の多角形』（1966）において、「形成途中のネーション」というカミュにとって重要なテーゼ（『ネジュマ』ではシ・モフタールの口から手短かに開陳された）を追求し、ファム・ファタルへの複数の愛を通して描き出そうとした。ネジュマの求婚者であるマルクの姿で（アルジェリアの大地に釘付けられた「フランスのアルジェリア」の信望者）、カミュはその死後、その仲間／ライバルというクランのなかに統合され、根源的な友愛を見出すことになる。一方、証言の義務から解放されて美的な探求に十全に身を捧げたディブは、異邦人／異邦人性についてカミュ的な思索をも深め、地中海の夢に彩られた生まれ故郷の大地を神話的なイマージュとして創りだした。

――最後に、1990年代以降、イスラーム主義者によるテロリズムの形をとって暴力が再来すると、逆説的ながら、ティパザや地中海の思考を謳うカミュが、マイッサ・ベイやアブデルカーデル・ジェマイ、ブアレム・サンサルなどのアルジェリア人作家を魅惑することになる。彼らは「アルジェリア人としてのカミュ」に対する賛嘆の念を公言し、政治的な対立を越えて彼との親縁的なつながりを主張するのである。